

教育的立場からみた歎異抄と隠者の夕暮の比較研究

高野千石

I 緒言

ルソーの思想をうけついで J. H. Pestalozzi (1746—1827) の長い生涯を貫いた思想は、神即自然より与えられた「内心の要求、の声に忠実であることの一語につきる。これは彼の波乱に富んだ生涯に、つねに彼の行くべき道を示し、しかも、それに導かれた彼の教育体験のなかから珠玉のような数々の思想が生まれ出るのである。彼の救いは、結果において、神即自然が「内心の要求、という生命直接の声に随順することによって達せられたものと見てよい。この小論は、東洋と西洋という時代と背景を異にしてはいるけれども、歴史をこえ、共に生命に帰一することにおいて、そこに安住と前進とを見出したペスタロッチーと親鸞の思想を比較検討し、末梢的な点では幾分の相異はあるにしても、人生の見方、考え方の基本的な態度において、共に生命の直接的な声に忠実である生活そのもののなかに、教育の真義即ち人間発展の契機を見出した点において一致すると考えられる2人の思想を、隠者の夕暮および歎異抄をとりあげ、比較検討したものである。

II 思想的背景

真に偉大な思想は、世音をこえて、長い歴史のうえに、今尚人間の心に脈々とした生命のいぶきを呼びおこすものである。わたくしは、この小論に於て、いまなお国民教育の基本的な考え方として残っているペスタロッチーの思想と、吾国の民主主義的思想の源流とでも云えそうな、而もそれが東洋人としての物の見方なり考え方に立って、今日尚われわれの生活の中に根強く残存している親鸞の浄土思想を、この2人に関する典型的な代表作とも見られる「隠者

の夕暮」と「歎異抄¹⁾」とを中心として比較検討を試み、その両者に流れる思想のなかから、教育の、ささやかではあるけれども、確乎として時代をこえて、また数々の思想をこえて妥当するであろうと思われるものを、抽出しようと試みたのであるが、それは一言にして言えば、形骸をはなれた生命のふれあいそれ自体が、教育の根本に必要な条件であるということに帰着してしまう。これがない教育は、それが如何に外見上立派に見えても、それは教育ではないとさえ云い得るのである。「隠者の夕暮」および「歎異抄」は、一見したところかなりニュアンスの相違が感ぜられる。極端に云うならば、この2人の思想は根本的に相違するのでさえいかと思われる点もないではない。その著しい点は、親鸞の思想では、徹底的な現世否定に始終しているかの如くに見える。しかし、そう見ることは必ずしも妥当な見解ではない。それは、彼の思想の中心をなしている本願による救済が、一度は絶望をこえた絶体絶命の頂点に立って、逆に大らかに展開されてくる弁証的な発展なのであって、一切を肯定する生命帰一の生活の中に、生々しく展開される煩惱具足の凡夫への捨身を意味するからなのである。この意味では、彼の本願という思想を徹底的に研究探索してみる必要があるのであるが、本論では歎異抄全篇を貫いて流れるものを、つとめて全体から明らかにしようとする態度をとった。もともと親鸞の思想は、浄土三部経その他の支那経論によったのであるが、これらはかなり古くから日本に伝わっていて、当時権門の相克という日本の当時の社会状況とむすびついて独得の会得がなされたものと思う。またペスタロッチーは革命という日本には見られない社会的変革のさ中

における西洋近代思想の出発点にあった人物である。浄土思想移入の転末については、他の文献にゆづるが、要するに形式を尊重する南方の小乗仏教と、支那大陸に拡まったどちらかと云えば思索的な色彩の濃やかな大乘仏教のうち、いわゆる浄土三部経と称せられる経典を中心として研究しつゝあった浄土教の一派があって、つとめて上述の三部経を中心に釈尊の真精神を明らかにしようと試みた。曇鸞、道綽、善導などはその代表的人物であったが、曇鸞たちの論注の類は、日本が大陸と交通が開かれると共にわが国に入り、特に聖徳太子の時代に、かなりの日本的な色彩を加えて来たのである。和国の教主とさえ云われる、太子の仏教讃仰は、十七ヶ条憲法となって具体的には政治理念の根本精神を顕示されたわけであるが、その伝承は次第に国民の間にゆきわたり、やがて源信をへて法然にうけつがれ、広く庶民の間にまで拡まって行ったのであるが、その若き弟子であった親鸞は自己の深い思索を青年らしい眼を以て当時の社会、それを背景にくり上げられる圧迫された人間の心の開放の所依を師教の中に見出したのである。彼は乱世と困窮の中にあげくれる人間の心の中に、深く、至純の願望の横たわるのを認め、この悲願を弥陀の誓願の上に味わうたのである。そしてこの誓願の実現される世界こそ報土即ち現世における浄土であり、それが打ちひしがれた人間の生命をとり戻し、その繁栄を約束する唯一の救済とみたのである。それゆえに、親鸞の思想の中核をなすものは、宿命とも云うべき人間の悲願に関するものであり、そのような人間苦の唯中にあるものこそが救済の正縁に値するものと見たのである。したがって、彼の関心は、生涯を通じて人間の心を圧迫するあさましい人間同志の相克と、みにくい闘争からへの自由であり、更には運命さえも度脱し得ることの出来る確乎たる信念であった。この意味に於いて親鸞の思想は、一見したところ、直接には教育の方法や原理とは関係がないかの如く見える。けれども、教育思想そのものは元來人間一般に関するものであり、たといその思想

が宗教的なものであるにせよ、またないにせよ、その思想が人間一般を問題としている以上、境遇や年齢に関係した問題ではない。このゆえに、親鸞の思想が教育の思想的原理になり得ないとするのは妥当ではない。ことに歎異抄の中に書かれてある親鸞の思想は、後年になって先師なきあとの疑義、異説を正すために、直系の弟子の一人が心魂をかたむけて書き残したものと云われるだけに、かえって親鸞の思想を身近に味わうことの出来るものである。そして、それに展開された人生観は、ありのままの人間を透徹した思索によって統一したものであり、「神即自然」とも云える如来の本願がすべての核心となる。これは現在日本の学校教育の中核となつていまでもうけつがれているペスタロッチーやデルタイなどの教育思想と軌を同じくするものであって、われわれは、この日本の宗教的先覚者の東洋思想のなかに、深い教育の原理をさえ見出すことが出来るのである。親鸞によって開宗された一つの思想は、結果として人間平等、個人尊重、自他相即、生命尊重等々近代思想の大きな要素を占めるものであり、しかもそれが日本の歴史的伝統のうちに洗練され消化されて、深く国民の生活の中にとけ込んでいる点に於て、吾々は現代教育哲学の上に一つのユニークなものを提供するものとする。私は、この小論に於て、人間というもののとらえ方に於て、かなりの一致性があるものと考えられるペスタロッチーと親鸞とを比較検討し、かなりの年代のずれはあるにせよ、洋の東西を問はず共通する人間観を、共に乱世という社会的動乱を背景として生きたこの2人の思想家をパターンとして教育の根元にあるものゝ抽出を試みたのであるが、それを掘り下げてゆけば、結局東洋と西洋というニュアンスのちがいきこあれ、共につきつめた人間観に於て、少しも異っていない普遍的なものを感じるのである。「隠者の夕暮」に端的に記述されたペスタロッチーの思想の核心をなすものはキリスト教の神であり、これが根本となって当時の社会状況が織りなした人間性への自覚の表明となったものであ

ろう。ペスタロッチャーにあっては、かなり著明に国家や社会が彼の探究の主題となる。「隠者の夕暮」のなかに、またかの⁵⁾「リーンハルト」、に於ても、また⁶⁾「シュタンツだより」、に於ても、やみに暴虐な心の压制者に対する強い怒りの言葉がほとぼり出ている。しかし乍ら、彼をしてかく言わしむるものは、彼の思想の中核をなす神の前には一切平等である筈の人間の姿なのである。さればこそ、彼は強く神より賜ったところの生命を認め、その育成を願うたのであろう。云いかえれば、ペスタロッチャーにあっては人間の心を侵襲する無形の暴力を子等の上を守るうと企てたとも思える。彼は青年時代ポドマーを中心とする愛国者団の一員として、いわゆる狂乱と怒濤 (Strum und Drung) の時代⁷⁾にあって、社会改革に身を投じようとしたのであったが、彼はこのような形式的な改革よりも、そのような理想社会をうち出してゆく人間の心の改革を最も必要なものであると考えるに至ったのである。このように、ペスタロッチャーの教育思想の背景には現実を直視し、現実の暗黒を打破する根底となる力を教育の上に見出したとみてよい。したがって彼の教育思想はその根底に於ては隠者の夕暮の全章を貫く神即自然観によって支えられた理想社会人としての児童の未来像なのであって、この思想は凝って人間の基礎教育における彼の数々のメトデイクとなつてあらわれる。彼が創案した直観のA、B、Cも、また教科教育の根底をなす教授法の原理も彼の思想の実際的、現実的表現と見ることが出来る。さてここで吾々は再び人間の平等と、同朋相食む戦乱の世にあって、悲願とも言える人間の衷心の願望を想念した東洋の一思想家に立ち返ってみよう。親鸞が書き残した文書にはペスタロッチャーのような直接的な社会論評はあまり見受けられない。彼の態度は徹底的な自己観照であつて、これから出発する彼の往生転生即ち矛盾に富んだ現世への解決は唯一つ、如来の招喚であり、それはむしろ人間苦の絶頂より仰がるゝ理想国土の実現であつた。それは歪んだ社会に問題ををはらみつゝも、前向きの姿勢で

これを改革せんとするものではなくて、深く人間の心のうちに報土建設の志願をうち立てることであつた。云うまでもなく教育は現実への直接の改革を目指すものではない。それは人間という基本的立場をふまえて将来の恵福と繁栄をかちとるための修練の時なのである。この意味に於て、ペスタロッチャーも親鸞もともに心の問題として人間苦を解決せんとしたわけである。そして何れにしても、共に生命それ自身の作用のうちに、真の教育の意義を見出したことには変りがない。

Ⅲ 誓願一如の教育

教育の要諦はまず誓願という言葉から出発する。これは、教師の側にあっては一人の子と雖も誓つて正覚に導入しなければ止まないという教師自身の衷心からの願望であり、児童の側にとってみれば限りなく学びとつてゆくとうとする内心の要求の声である。教育実践における教師のかゝる誓願はそれ自身ヒューマンイズムなのであり、あらゆる教育の中核をなすものであつて、教育基本法⁸⁾の精神もこれを立法化したものとみることが出来る。教師のこの自覚は、やがてすべての児童を立派に育てねばやまないという誓願にまで発展する。これはペスタロッチャーの全生涯を通じての教育生活を見れば明らかに理會される。ゆえに、この教師と児童との間に於ける結合は、共に生命それ自体の発動に基づく点に於いて一なのである。願は行為(業)を産む、誓願は、やがて行動となつて、ここに誓願に基礎づけられた教育活動が展開する。「弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏まふさんとおもひたつところのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり」(抄1)、この歎異抄の第1節は、誓願によって結ばれてゆく人間の心と、誓願によって無限の発展を約束される人間発展の原理とを示したものであろう。語義の解釈については異説もあるが、弥陀の誓願とは天地自然の律動であり、人間の至心欲求の当体でもあり、またペスタロッチャーの「神

即自然⁹⁾とも解せられよう。往生とは、限りなき前進の姿であり、たえまない正覚への歩みとも解せられる。この限りなき前進をうみ出すもの、それが誓願なのである。弥陀すなわち無限生命とは対立相対をこえて認知されるはかりなきいのちであり、それは来れるが如く人間の心に去来し、彼の心を奥底からゆさぶり、生への歩みをさし指すものである。かの児童が身近かな現象に不思議を感じ、これを究明しようとする素朴な科学心すらも、また彼等の生命の要求であり、無限生命のこえにはかならぬ。かくて教育に於ては、学びとろうとする意志も、またこれに立ち向う教師の心も共に如来より賜わりたるものにほかならない。それゆえ、教育における共感とは生命それ自身の相互貫通であり、共に誓願に支えられつゝ生くる者が体験する身近かな無限生命の実感とも云えよう。わたくしは強く、教育が枯渇した形式の残骸をすて、この生々しい生命のふれあいの上に於て行われてこそ、教育本来の姿をとり戻すものと信ずる。教育におけるこの共感ないし感動は、教育におけるアルファでありオメガである。それは教育における限りなき前進の因であり、限りなき知慧の源泉である。そして歎異抄に述べられている「撰取不捨の利益」¹⁰⁾とは、かゝる共感の世界の中に於て自然に獲得される教育の成果であろう。一切の人間に共通な原理をこそ、吾々は求めねばならぬ。「人間の本質をなすもの、彼が必要とするもの、彼を高めるもの、そして彼を卑しくするもの、それこそ国民の牧者にも必要なものであり、最も賤しい小屋に住む人間にも必要なものである」(夕暮3)、ペスタロッチーはまず教育の要諦を心に求めている。彼をして強くするもの、弱くするもの、高めるもの、卑しくするもの…これらに対する哲学的、人間学的探究が教育の初めであると云う。そして、それこそ「国民の牧者」にも「最も賤しい小屋に住む人間」にも必要なものであると云う。

隠者の夕暮に記述されたペスタロッチーのこの教育に於ける普遍的な原理とは一体何であろう

か。「到るところで人類はこの必要を感じている。到るところで彼等は困苦と労作と熱望とを以て向上しようと努めている。」(夕暮4)にもかゝらず「人類の幾世代は満足せずに凋落して仕舞う」(全上)はかなき空虚さの中において「秋の木の実が成熟して使命を果したのちに、冬の憩いのために」(全上)静かにみち足りた境地を以て地に落つることを阻むものを彼はみつめるのである。そして実生活の中からかくとくされる「身近かな真理感」こそが彼の生命に光を与える第一の原動力であるとし、この真理感を育てる教育こそ人間の知慧を培い、人間の恵福を育てるものであると云うのである。ペスタロッチーは深くルソーの影響をうけている。自然に帰入することをさげんだルソーは、人為をこえた自然のしくみのなかに深く真理を求めた。人間の教育は所詮は自然が教育することなのであることをさげんだのである。如来の誓願の中に仰がるる自然の摂理のなかに教育の心を見出したと云ってもよいであろう。それは求めようとする心と、教えて止まないとする無限生命のこえに支えられた師弟一如の世界である。かくの如き無限の摂受に於て、ペスタロッチーも親鸞も、共に我就をはなれた自然の作用を深く教育作用の根源に認めたのである。生命の共感是一種の想念である。「子心と親心」とに於ける想念を出発点として、ペスタロッチーは教育における師弟想念の世界を記述した。このような想念の世界にはもはや師弟という形式的な差別は考えられよう筈もなく、さればこそ「親鸞は弟子一人も」¹¹⁾持てなかったのである。それは教育における一つの真実が、教えようとする教師の我執にあるのではなく、また学ぼうとする児童の自我にあるのでもなく、すべては共に平等であるいのちの業であることを深く認識したのである。そして「彼の心を高め」また「低める」ものさえも、すべて「如来より賜わりたる」いのちであると云う。われわれは、ここに、改めて誓願の教育なるものを考えてゆかねばならぬ。それは生命に帰一する教育の原理であり、自発性の教育も、創造性を培う教育

も、主体性を高める教育も、ともに帰入し得る原理を内包する。そしてこの教育は、往生への教育、すなわち前進への教育であり、限りなき正覚への歩みに於ける共感の教育でもある。生命は無限の可能性を含むがゆえに、それは完全なる自由すなわち完全なる自律への教育であり、かぎりなき自己創造の教育でもある。児童は、この自由への前進の過程に於て、自己をとりかこむすべてへの真実の認識をかちとる。真実の認識こそ、真の意味に於ける知識なのである。それは生々しい生命の要求を前提としてかちとられた無限の応用をはらむ生きた力となる。

かくて往生即ち前進の教育は転生の教育であり、日々発展する自己改革への教育であり、無限の発展を内在する人間本来の志向をみたす教育である。云うまでもなく、教育は人間の衷心の志向を培うものでなければならぬ。「内心の安らぎ」も「人生の悦楽」もすべて内心の要求すなわち衷心の願望成就の世界に於て成立する。報土即ち願望成就の世界とはこの衷心からのねがいの報いられた¹²⁾世界である。それゆえ、誓願の教育は、つねに生命の絶体肯定の上に立ち乍ら、報土往生への努力と精進とを前提とするものであり、その過程の中に於て、真実の知識がかくとくされることを期待するものである。

Ⅲ 「想念」と「転生」における教育的意義

吾々は前節において、限りなき人間の発展が、深く生命それ自身の内的要求に横たわることを知った。その内的要求は、極めて主観的な独断と云えるかも知れない。しかしかかる要求は彼が存在する周囲の一切の客観的な条件と環境に於て成立しつゝあるものである。ゆえにすべての人間の内面的要求は、若しそれが十分に内省され、自己選択されたものであるならば、それは極めて忠実に彼の周囲の諸条件を彼の生存の上に反映したものと見ることが出来よう。もともと生命現象それ自身すらも客観的な存在

と見ることが出来、好、悪、喜、怒も只一片の生命現象にすぎない。されば生命よりほとぼしり出ずる内心の要求もまた周囲客観の反映であり、個々の人格の尊厳も、またかくの如き生命の客観的存在性を肯定するがゆえに主張できるものと云えよう。人間尊重とは、一人一人の精神の独立性と客観的存在性とを認め、かけがえない生命の唯一の存在価値を唯一なるがゆえに尊重することにほかならない。そして人間尊重を基調とする教育は、この生命の無限の発展と創造とを期待することに於て初めて成立する。かの「摂取不捨の利益」とはかゝる転生の過程における自己認識の再構成であり、より高い妥当性と合理性への自己発展にほかならない。かのデルタイ (Wilhelm Dilthey, 1833-1911) の云う「生活関連」¹³⁾ (Lebenszusammenhang) なのである。正覚とは正にこれを示した言葉であろう。正覚への道とは、それゆえに、つねに生自体が発動してかくとくし乍ら、しかもたえず自己消化しつゝ生々発展する認識過程の完全なる合理化、普遍化への道なのであって、単に死滅した概念や知識の集積ではない。願生往生の立脚点があくまで行動と思考によって学びとられた生々しい知識即ちペスタロッチーの云う「せまい範囲でつくられる真理感」(夕暮¹²⁾) なのである。「弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすと知るべし。そのゆえは罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします」

(抄1) 誓願の教育は、生命それ自身の要求を出発点とするがゆえに、年令をこえ、善悪をこえて妥当する。生きとし生くるもの、本願の要求は時空を超えて存在する。そして生命実現の本願は只信心のみを必要とするという。かかる信心とは一体何であろうか。それは正覚への因が、社会相関の下における自己完成の機転が、衷心生命のこえに乗托して、いつわらず、かぎらずに願望の成就へ向って努力することに於て必ず期待できるという確信である。そしてこの確信は、自己の本願に反逆し、地獄の責め苦にあえぐ罪惡深重の人にして、初めて獲得される

信心即ち会得であろう。云うなれば自己生命の反逆のうちに、転生往生への道が内包されているとも云えよう。想念とは内なる生命のこえを内観することであり、転生とはかゝる生命直接の要求に忠実に従ってゆく行動のうちに自然にはぐくまれる前進者の、より高き完成への姿である。

真実に人間を完成へと導くもの、それは教師それ自身の、人間的な想念と転生の姿にはかならない。教師は、かゝる想念と転生の、偽らざる実現の姿に於て、教育の最も核心にあるものをさし示す。児童は教師を縁として、共感をもって、また時としては教師に弓引く反逆の心を以て、限りなき想念と転生への歩みをつづける。彼を教育するものは、只彼自身の衷心生命のよび声そのものに外ならないのである。歎異抄第1節に述べているこの一文は、まさに教育の考え方における痛烈な一つの批拌であり、反省であると云わねばならぬ。親鸞が「弟子一人も持たずさふらう」とさげんだ自己無力の謙虚な声をわれわれは聞かねばならぬ。かくて教育の素因は教師の側にのみあるものでもなく、また児童の自我にあるものでもなく、それは誓願という名のもとに統一された生命相互の共感のうちに包含せられる。想念とはたえまなく人間の心の奥底に呼びかけてくる内なる生命のこえに耳をかたむけることなのである。かくてペスタロッチーの云う「人間は彼の要求にかり立てられて、この真理への道を本性の奥底にみつける」（夕暮6）ことが出来るのである。そしてこの真理こそ「汝の最も手近かな幸福に於て確かなる導きの星」（夕暮9）なのである。かくてペスタロッチーが、彼の人間教育の最も基本的なものとして彼の生涯を貫いてやまなかったものは、児童の素直な内心の呼び声であった。「吾々の境遇上の要求からあらわれてくる、この人間の知慧は、吾々の活動力を強め、かつこれを陶冶する」（夕暮、13）ところの「生命それ自身、を出発点として行われる自己活動そのものが陶冶の根本とみるのである。しかも彼は、この生命自身が人間を陶冶すると云う自然

の原理を教育のすべての上に味わうたのである。彼は云う、「高貴なる自然の道よ、汝が導きゆく目標である真理は力であり、行ないであり、陶冶の源泉であり、人類の全本質の充実であり、整調である。」（夕暮、15）。彼はこの生命における自然の導きが、教育のみならず、政治に於ても、また指導の原理であるとし、反生命的な一切の行為を悪とみたのである。それは一切の生命の要求を等しく天恵として容認することであり、一切の欲望の根元を理由あるものとして容認することにはかならぬ。

われわれは茲に於て、一切の生命を天与のものとして容認する限りに於て、更にその本質と諸相を凝視せねばならぬ。吾々が生命と認めるものはすべて共通したいくつかの属性をもっているが、その著しい特徴は持続と拡充であろう。そしてこの不断の変転の姿はおよそ最も下等な生物の間にも認めることが出来るものであるが、人間のような高等動物ではさまざまな欲求となって発現する。性欲や食欲は最も基本的な生命の拡充と持続に関する欲求であるが、他のすべての高尚な欲求すらも結局は、生命の持続と拡充という基本的な欲求の変形として考えることが出来よう。そしてこれらの欲求は、生命のおかれた客観的な条件によってその内容も、また強さも変るのは当然であって、欲求は方向と強さを併有するベクトルと見做すことが出来よう。圧迫された生命が、解脱と解放を要求し、うえた生命が食を要求するのは自然の道である。吾々がすでに述べ来た「本願の選択」とは、時々刻々変化しつつある欲求ベクトルの推移を、自己自身の内省比較によって、最も生命の要求に合致した素願（Elementary Wish）を発見することなのである。云いかえれば、現在何が最も重要なかという自問にほかならない。即ち、この作用は、欲望の合理化、科学化なのである。

かくて生命の容認の教育とは、客観的条件下に生起するすべての素願をば容認し、育成し、その充足に対する最善の方策と努力を教えるものでなければならぬ。それゆえに、かのペ

スタロッターの云う「あまりに強制された教育の仕方は生命をそこのう」ものなのである。生命帰一の教育はその原理に於ては何等の拘束もない。それゆえ、ペスタロッターの眼には「現代教育において行われつゝある幾千もの小技巧」(夕暮, 24)は、かえって児童の生命を枯らすものときえ見えるのである。教育は形式ではない。それはたえず変転する児童の心に対応するものでなければならぬ。

ペスタロッターは隠者の夕暮, 第19節より数節にわたって、強く自然の力こそ教育の原理たるべきことをたゞえ、形式に終始する教育と、単なる概念の注入を以てする教育を強く戒めているのであるが、これは彼の教育思想から導かれる当然の帰結であろう。生命こそ生きとし生くる人間にとっては等しく平等である。さればこそ「玉座の上にあっても、木の葉のかげに住っても同じ人間」(夕暮, 1)なのである。浄土和讃に云う「平等覚に帰命せよ」とはこの万人平等である人間の素願こそ、一切の論議を超えて帰入すべき人生の指標であり、教育の前提であることを明示したものであろう。

以上われわれは、主として教育の根元が、万人平等である生命の素願を中心として行わるべきことを考察したのであるが、次に児童と教師との心的相関の面から少しく考察してみたい。ペスタロッターの学校のみならず、洋の東西に於て、著しい教育成果を残したものは、そこに独得の心的相関が存在したことは見逃せない。そしてこの心的相関は、何れの場合にも、単なる形式的な師弟関係を超越した、生命そのもののふれあいであった様である。「おのおの十余ヶ国のさかえをこえて、身命をかえりみずして、たづねきたらしめ給う御こころざし、ひとえに往生極楽の道を問いきかんがためなり」(抄2) 求道のところは教育の初めである。この歎異抄の第2節の文章は、遠く常陸の国にとり残された親鸞の弟子たちの心にもえるひたむきな求道の心を述べたものである。身命をかえりみずして旧師の教えを乞はうとするもえるような求道のところに対して、親鸞は簡明直載に

こう答えるのである。「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしとよきひとの仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり」(抄2)。真実の間に答える人間の生命のこえはいつも簡明でも直載なのである。千里の道を遠しとせず生命をかけて自己自身の疑義を明らかにしようとするその志向のうちに、すでに往生転生への第一歩が展開されていることを親鸞はただ「よきひとの仰せ」¹⁴⁾として明らかに繰り返すのである。吾々は、教育に於てとかく技法や内容に就するのあまり、この修学の第一歩である志向を忘却する。教育の初めは「身命をかえりみずして、たづねきたらしめ給う御こころざし」なのであり、その帰結はただ「よきひとの仰せ」に尽きる。さて児童の求めるものは、かの常陸の人たちのものとは内容の上ではちがっているかも知れない。しかし「弥陀の本願は老少善悪のひとをえらばない」のである。吾々は児童の言葉や顔色のなかに、彼の素願をきいてやらなければならない。願いに生きる往生人だけが他人の素願を明らかにきくことができるのである。仏々想念とはかゝる世界を云う。それは思議して得られるものでもなく、勿論固定した一片の教育概念で到達できるものでもない。まだ一言も発することの出来ない赤児でさえ、賢明な母親はそれが何を求め、何を訴えているかを知るのである。教師はこの意味に於て賢明な母親のこころを持たなければならない。

この意味に於て、児童の意欲を如何にして高めるかということは極めて重要である。児童の知識に対する欲求は一見きまぐれのように見える。この無統一のなかに、欲求の流れのなかに、教師は児童の本性を見、生命の声に乗托して生きるよろこびを与えてゆかねばならぬ。教育実践とは、かくの如き生命の想念のなかに、報土往生へのよろこびをわかち合う生活のことでなければならない。すべての児童が、自由に伸々とよろこんで学習してゆく空気が、内心の要求をみたした生命の教育の確実な証拠なのである。「安楽浄土の依正は、法蔵願力のなせる

なり、天上天下にたぐいなし、大心力を帰命せよ」(和讃)この詩は願力の上に顕現せられた生命自身の発露そのもののうちに、恵福の源泉のあることを示し、而もこの生命力即ち願力の独尊性と人間形成における最高の価値をたたえて、一切の教育活動がこの大心力のうえに成就することを教えたものであろう。

さてこの大心力に帰命する生活は様々な相となって展開する。好ましからぬ行為も起って来るかも知れぬ。しかし乍ら、教育が児童たちの生命を培うものであることをさえ明らかにしておくならば、最善の策は立ち得る筈のものである。素願の発見とその実現への努力は決して野放しの形式的自由ではないのである。それは思考と実践とを密着させた生きた教育である。吾々は、学校はあくまで教育の場であることを忘れてはならぬと思う。児童の生活実践と思考を通して真の道徳への開眼を行うことこそ道徳教育本来の姿なのである。吾々は生命に乗托して展開されつゝある児童本来の姿の中に、児童たちの素願を認め、育てゆくものでなければならぬ。ニールの学校は、正にかくの如き本能随順の生活の中から真実の道徳への開眼をねらいとするものであった。云うまでもなく、児童たちの願望は家庭の反影であり、社会の反影にすぎない。願望それ自身には何の罪もないのである。「善人なほもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」(抄3)とは、このような反影の中にあつて、いな反影それ自身によって、正覚への転生が約束される自然の救済を明らかにしたものであろう。かくて吾々は不徳の影にやどされた児童たちの真実生命の要求をまのあたり見る。ゆえに非行を一片の社会通念によって形式的に律してはならぬ。非行のよって来る根元を彼自身の心のうちに、また彼をとりまく周囲の陰影の上に、深く探求してゆかねばならぬ。親鸞は人間のおち入り易き罪を考察した。己れの本願をうらぎり、他人の本願をふみにじる生命への反逆を人間の弱さの上に痛烈に認めたのである。彼の徹底した内観は、所詮は内に虚仮の心を抱き、外に賢善精進の相をよそほうて地獄の

責め苦にあえぐ人間の弱さであつた。これは彼をして、愚禿と称せざるを得なかつた最終の帰結ではあつたが、それなればこそ、如来(来れるが如きもの)への随順が無上の救済と仰がるゝに至つたのである。地獄とはかくの如き人間素願の声に反逆する生活の上に味わゝるゝ苦惱であり、しかもこの苦惱がやがては安楽浄土(正覚の世界)へ帰入せしめる転機とみるのである。人間は外的苦痛には比較的耐え得るものである。しかし生命の声に反逆する内面的な苦惱は正に地獄の責め苦であらう。悶絶ともきこゆる地獄の責め苦は、やがて大いなる転生の因となる。即ち人間はこの地獄の責め苦によつて、自ら生命随順への新たな認識をからとるのである。このような自己反逆は、児童たちの生活には少いであらう。自己反逆は不徹底な人間の甘さなのである。生命よりも概念に重きをおく人間のいいかげんなうぬぼれに過ぎぬのである。

児童たちは、未だこのような大人たちの悪業には染まっていない。彼等はあるがまゝに生き、願望のまゝに育てゆく。云いかえれば彼等は生まれ乍らの「妙好人」なのである。彼等の反抗や不満は、多くの場合、無責任な大人たちの生命反逆のまきぞえにすぎぬのである。この意味に於て、児童の非行をかるがるしく扱うべきではない。それは大人の罪悪に対する素直な抗議ですらあり得る場合が多い。仏典によれば、かつて世自在王仏のもとにあつて、十方世界の善悪の根元を睹見し、浄土王国の成因を探究した一求道者の姿が記述されているが、吾々は善悪をこえて初めて真実の姿をば認識することが出来るのである。「善悪総じてもて存知せざる」世界の中にあつてこそ、人間は初めて真実を視てゆくことが出来るのである。科学で云う物指は便宜的なものにすぎぬ。それは複雑な事象を比較し、そのうちにかくされた真実を見出してゆくための一つ的手段にすぎぬのであつて、尺度そのものが絶対の意味をもつものではない。修学上に於ける規則や道徳はそれを尺度として道徳的真実に到達する一つ的手段である

う。ゆえに、少くとも学びの世界に於ては、いきぎよく道徳への妄執を捨て、おきてへの妄執をすて、道徳的真實の探究に旅立たねばならぬ。一切の純一な内心の願望に暗き影を残してはならない。そして報土往生に於て培うあらゆる配慮こそ教師の心である。吾々はかのペスタロッチーが「隠者の夕暮」に書き残してくれた次の文章を深く味わうべきであろう。「君主よ、彼等の眠らぬ夜の涙のうちに、また彼等の昼の重荷の苦しみのうちに、汝の囚人のために智慧を学べ。そしてこのような道において智慧を求め人々に、汝の有ってゐる生殺の権利を与えよ。君主よ、この世の浄福は陶冶された人間らしきであり、そしてこの人間らしきに依つてのみ啓蒙と知慧とそして一切の法律の内的浄福との力が働くのである。」(夕暮, 53)そして「自然のこの秩序を離れて、階級や職業や支配や奉仕に関する陶冶を不自然に強行する者は、人類を最も自然的な浄福の悦楽から誘つて、暗礁多き海へと導くものである。」(夕暮, 66)

V 結 論

以上われわれは、主として歎異抄その他の仏典を参考として、その上にあらわれた親鸞の思想を概観し、その核心をなすものは選択された本願の成就が人間発展の自然の道であると見、この本願往生のプロセスに展開される人間発展の諸相を教育的見地から検討し、これを「隠者の夕暮」と比較対照してみた。これらの思想を一貫するものは、人間生命の絶体的肯定であり、人格の向上が本質的には自然より与えられた生命それ自身の展開の諸相のうちに内在するものであることを知った。「隠者の夕暮」の全篇を貫く原理的なものは神即自然観によって支えられた生命の意志であり、これは親鸞の云う願望であり本願である。親鸞の特徴は無差別な願望そのものがすべて人間を高めるものであるという徹底した本願依存主義であるのに対し、ペスタロッチーにあっては、この生命をこそ捉えねばならぬと力説する。そして、「人間は、

かの要求にかり立てられて、この真理への道を本性の奥底に発見する」(夕暮, 6)と述べて、生命の要求こそが人間をして真理への道の発見に導くものであると云う。ゆえに、彼にあっては、教育とは児童自身に自己の生命を発見させることであつて、彼の教育探究は「人生の悦楽と浄福」の根元であるところの「彼の本性の要求」そのものから出発している。そして「彼の本性の要求」の声にかり立てられて人間は「この真理への道」を彼自身の「本性の奥底」に発見するとみるのである。この思想は自己自身の生命が「如来より賜りたるもの」であり、したがつて願望そのものに自然の摂理を認め、その成就に向つて努力することこそ如来の救済であり、如来への報恩であると明言する親鸞の思想と本質的には異っていない。ペスタロッチーにあっては、如来は自然であり、神であつた。そしてこの自然生命に乗托する道を親鸞は「無碍の一道」とし、またそれは無限の智慧であるとしたのである。

人間に必要なのは概念的な知識ではなくて、それを生活の知慧にまで止揚するところの力であつて、この知慧化せられたる知識は、生命の自然の要求のうちに育くまれ、それは再び生命のなかに還流されて、生きる力となり、感情となりそして終局には確実な応用となつてあらわれる(夕暮, 14参照)。これは親鸞が本願に乗托して前進する生活そのものが正覚への原因であるという思想と全く同じである。本願に反逆して、中心の生命要求のこえを無視した不自然な生活は、当然の報として人間は苦悩する。この苦悩の絶望のうちに人間は救いを求めるのではあるが、救いの当体を明らかにしない以上人間は永遠の流転をくり返すだけである。しからばその救いとは何か、親鸞は唯、衷心願望に随順せよとだけ教えるのである。「自然法爾、ありのまゝに生きることが、自己を偽わらず、他を偽わらず、自然のまゝの真實に生きてゆくことが、一切教育の基本である」とペスタロッチーの教育思想を親鸞流に書きあらわすことが出来よう。したがつて「真理の単なる幻影」にと

りつかれた、生命の要求をおしちぢめようとする教育は、ペスタロッチーにとっては邪道であることになり「人間を徒に疲労させる」だけであると言ひ、親鸞における現世の地獄は、この人間の本性から外れた虚仮の生活に対する当然の報であるとしているのである。「人をひきつける興味としては少しもなく、何等の応用をも出来ないような、真理についての声や言葉に対する渴望、生い立つ人間のすべての力を、硬直した偏頗な学校教師の意見に従わせること、乃至は人間陶冶の根底における言葉のやりとりと流行の教育法の幾千もの小技巧、これらのすべては、骨折りながら而も人を導いて自然の道から外らせる」(夕暮24)とペスタロッチーは述べて、教育の根底に於ける誤りを指摘する。そしてこの誤れる学校教育は益々教師をかり立て、地獄への道を教えることになり、この地獄の教育より開放する道として、親鸞もペスタロッチーも共に生命に帰一する教育を説き、空しい虚飾への傾向が人間の生命の力を奪い、そして自らを高め、強めるためには最も危険なものとして強く戒めたのである。云うまでもなく、教育は、人間の自然的発展の法則を無視しては如何なるアイデアに立っても成立しないのであって、教育科学の目指すものもそれは単なる理論と計算によって教育をはじき出すものではなく、人間発展の自然的法則をより適確に事実に基づいて発見し、これを教育に応用することにほかならない。論終。

終りにのぞみ数回にわたって御検討をいただいた島根大学、近藤正樹教授および、始終御指導と御激励をいただいた玖村敏雄先生、小野暁清先生に厚く謝意を表する。また引用した文は、金子大栄校訂、歎異抄(岩波)および長田新訳、隠者の夕暮(岩波)によった。併せて謝意を表する。

註

- 1) 歎異抄は親鸞自作の著書ではないが、先師なきあとの疑義を正さんとした弟子の著作と云わるゝだけに、かえって素直に親鸞の思想を表現しているよう

に思う。

- 2) 国訳大蔵經, 宗典部, 第9巻参照。
- 3) 仏説無量壽經, 卷上。
- 4) 松田義哲, ペスタロッチーの教育思想p.49。
- 5) J. H. Pestalozzi ; Lienhard und Gertrud der C. A. (1818).
松本義懿訳「リーन्हルトとゲルトルート」, ペスタロッチー全集(イデア書院)。
- 6) 長田新訳・隠者の夕暮, シュタンツだより(岩波)。
- 7) 玖村敏雄, ペスタロッチーの生涯(玉川大学)。
- 8) Amita. 無量壽の意味から無限生命と訳す, これを固定化し偶像化して考えたのでは歎異抄全文の意味がわからなくなる。無量壽經卷上に記された48の誓願は萬人の衷心の願望を集約的に表現したものであろう。これらの願望は生命直接の要求であるから, 思議して決定されるものではないという意味。
- 9) ペスタロッチーによれば神は人間の最内部に存在し自然は人間の内面的本質であるから神と自然とは同一であると見る, ゆえに独立者とは神に基礎をおく存在に帰ることである。「神に対する信仰よ, 汝は陶冶されたる知慧や結論ではない。汝は単純な, 純粹な感じであり, 神—すなわち父にまします—という自然の呼びかけに耳傾くる無邪気な耳である」(夕暮, 82)。
- 10) 無限生命それ自身のうちに正覚への発展が内在すると見れば, 撰取不捨の利益であることは明らかであらう。
- 11) 歎異抄, 第6節, 「親鸞は弟子一人もたず候, その故は, わがはからいにてひとに念仏まをさせ候はばこそ弟子にて候はめ, ひとへに弥陀の御催にあづかりて念仏まをし候ふ人をわが弟子とまをすこと極めて荒涼のことなり云々。」
- 12) 報土往生, 衷心の願望が努力と精進によって報いられた世界を報土という。教育は自然生命に基礎をおきつゝ結局は衷心の願望をあきらかにし, その達成への工夫と努力を教えるものであらう。
- 13) W. Dilthey の哲学的立場は「生」が已れ自身を省察する自覚作用に特有な哲学的方法を認めようとするもので, 生自体および生が発動してゆく Lebenszusammenhang が実在の最深最奥のものであるとみる。これは本願に乗托して往生する過程そのもののうちに正覚があると見るのと同じ考えである。
- 14) 師であった法然のことをさす。
- 15) ペスタロッチー研究の参考書については註7の文献の末尾に詳細な紹介がある。